

## ファイサリア・レジデンス

ムハヤ・コンパウンドの爆破事件から三週間が過ぎ一二月となった。

爆破事件以来、リヤドの治安体制は一段と厳しくなった。主要官庁、一流ホテルなど主要なビルの入口や周囲には一様に車止め用のコンクリートブロックが置かれた。このコンクリートブロックは高さ一メートル、幅二メートルほどの分厚いもので、海岸の近くなどで見られる擁壁ブロックをより強固にしたようなものだった。それが幾つも並んで置かれている。お蔭で広い通りが狭くなり無機質なコンクリートの灰色が息苦しさを増していた。

入り口付近に設けられたチェックポイント(検問所)では、数人のガードマンが全ての車のボンネット及びトランクを開け爆発物などがないか入念に点検している。

慎太郎は、いろいろ考えた末に、結局、現在宿泊している

アル・ファイサリア・ホテルに向き合って建つファイサリア・レジデンスに住むことにした。

欧米人を中心に危険な街中を避け郊外のコンパウンドに住むのが流行りで、慎太郎もその内の一つを勧められ下見に行つてはみたが、気が進まなかったからだ。

向こう見ずかもしれないが、慎太郎は、折角アラブに居るのだから、アラブ人と触れ合えるところに住みアラブに馴染みたいと思っていた。

下見に訪ねてみたのはアリゾナ・コンパウンドというリヤドで最も評判の良いところだった。ここはリヤドの中心部からは遠く離れた、街からは完全に切り離された租界のようなところだった。

チェックポイントは正門までの間に三ヶ所設けられていた。正門から一キロ程度は離れた最初のチェックポイントでは車に爆弾が仕掛けられていないかを入念にチェックされた。ここを過ぎると二つ目のチェックポイントがあり、平屋の建物の中にいるガードマンが安全と認めると、頑丈な車輪

付きの鉄製の電動ゲートが開けられる。そして、正門にある最終チェックポイントでは、さらにイカマがチェックされ、やはり頑丈な鉄製のゲートが開けられる。この最終チェックポイントの脇には装甲車が置かれ、兵士が常に二人乗っていて一人は装備された大型の機関銃を握りしめていた。蟻も入れないような厳戒態勢だった。

この最終チェックポイントのある正門を抜けると、別天地が広がる。そこには、アリゾナという名の示す通り、米国南部にある緑に囲まれた住宅地を思わせる広大な町並みがあった。

欧米人達は、ここでは、安心して広い道路を歩いていた。

慎太郎は、米国郊外の高級住宅街の中にあるような、木々の緑に包まれた道を歩いていて、偶然、ジョッキング中のポール・ダグラスと会った。ポールとは、銀行口座を開くためにサンバに行った時に会っただけだったが、彼の米国人らしい善良で素朴な人柄が印象深かったので良く憶えていた。

ポールも良く憶えていたようで、立ち止まって汗をぬぐうと、二人に話しかけてきた。

「やあ、ミスター・イケナミ。ミスター・カサハラ。こんにちは。この間はどうも。今日は、何ですか。どなたかのお宅にでも来ましたか」

「こんにちは。ダグラスさん。今、住むところを探しているところなのですが、今日は、評判の良いこのコンパウンドの下見に来ました。まったく素晴らしいところですね。まるでアメリカの高級住宅街に行ったような錯覚に陥りました」

そう慎太郎が言うと、ポールは、その太目の体を揺らせながら満面に笑みを湛(たた)えた。

「そうなんですよ。このコンパウンドは、まるでテキサスな感じです。私の田舎で過ごしているような気がして気が休まるんです。この中には、プールは勿論、テニスコート、それに私の好きなゴルフのコースもハーフですがあるんですよ。暇な時はいつもそこでプレーしているんです。何しろ雨が降ることがないのでいつでも快適なプレーです。楽しいですよ。ミスター・イケナミも住まわれたら良いと思います。歓迎し

ますよ」

ポールは慎太郎にアリゾナに住むことを勧めた。

そして、脇に後から走ってきた東洋系の女性が来ると二人にその女性を紹介した。

「こちらが私の妻です。タイ出身で公認会計士なんですよ。彼女も同じ会社で財務の仕事を手伝ってくれているんです。ただ、いつも私よりは早く家に帰って家事もこなしてくれているので助かります。良く出来た妻なんです。名前はスパポーンと言います」

ポールは米国人らしく日本人的な謙遜は一切無く率直に自分の妻を褒めた。

「初めまして、スパポーンです。宜しくお願いします」  
スリムで可憐なスパポーンは、そう言って二人に握手を求めてきた。

「こちらこそ宜しくお願いします。私は池波と言います。こちらは笠原と言います」

「笠原です。スパポーンさん、お会いできて光栄です。宜しくお願いします」

二人は握手をしながら言った。

「ミスター・イケナミ、もし、このアリゾナに住むようになったら、是非、家に遊びに来て下さい。家内自慢のタイ料理をご用意させてもらいますから。本当に美味しいですよ」

ポールは、また楽しそうに自慢をした。スパポーンは嬉しそうにポールに体を持たせ掛けながら、それを聞いていた。二人は見るからに幸せ一杯の仲睦(むつ)まじそうなカップルだった。

「有難うございます。その節は宜しくお願いします」

と慎太郎はポールの親切な言葉に笑顔で応えた。

陽気なポールは、ジョギングを続けなければと言うと、慎太郎達に別れの挨拶をして、なにやら口ずさみながら、そこを走り去って行った。

慎太郎は、誠に平和な光景だと思いながらポールの後ろ姿をしばらく見送っていた。

この時は、やがて彼が沙漠のサソリに捕まり首を斬られることになるなど思いも寄らなかった。

アリゾナ・コンパウンドの周囲は、高い塀に囲まれ、塀の上には、電流の流された有刺鉄線が張り巡らされていた。まるで城郭のようだった。安全性は確保されているように思えたが、慎太郎は、アラブの香りが微塵も感じられない、アラブ社会から完全に隔離されたこのような街を好きにはなれなかった。

佐々木リヤド支店長は、このアリゾナのような郊外にある別のコンパウンドに住んでいたので、慎太郎がファイサリア・レジデンスに住みたいと言った時には、怪訝な顔をしたが、一度決めたら滅多なことでは変えない慎太郎の性格に馴染んできていた支店長は敢えて反対はしなかった。慎太郎はホテルに戻り、早速、賃貸契約を結ぶことにした。

「オスマ、この間のラマダン休暇にはアブハに帰ったのかい」

「アブハにはいつでも帰れるから帰りませんでした。ドバイで遊んで来ましたよ」

「そう、ドバイは良いらしいね。この間オスマが言っていた  
バーレーンのハビビと一緒に行ったの」

オスマは慎太郎がこの間教えたハビビという言葉をおぼえて  
てくれているのが嬉しかった。

「ミスター・イケナミはハビビをおぼえましたね。その使い方  
で間違いありません。結構です。ところで、バーレーンのハ  
ビビのことをミスター・イケナミに言いましたっけ。違いま  
すよ。あのハビビとはもう付き合っていないません」

「あれあれ、その前はジェッタ・ハビビと別れたと言ってい  
たから、随分、早いね。まさか、今度はドバイ・ハビビとい  
う分けじゃないだろうね」

「ミスター・イケナミ、ハビビ、ハビビとそう何度も言わな  
いで下さい。実は凶星です。ドバイの女性は開放的で良いで  
すよ。今度、リヤドに遊びに来ると言っていましたよ」

「このリヤドに……。オスマに会いたいからそう言ったの  
かもしれないが、そんな開放的な女性にはリヤドは向いてな  
いんじゃないの」

「そうなんですよ。僕が行くから良いよと行ったんですがね。

来ると言ってきかないんですよ。困ったものです」

「ちっとも困ってないんじゃないの。オスマ、ご馳走さま」

オスマは、色は多少浅黒いが、良い男だから女性が放っておく筈がない。それにしても、随分短期間でハビビを変えるものだと感心していた。

「ジエツダ・ハビビ、バーレーン・ハビビ、ドバイ・ハビビ」

と慎太郎が調子を付けて言うと、

「ミスター・イケナミ、勘弁して下さいよ」

オスマはそう言いながら満更でもないようだった。

ファイサリア・レジデンスは、広大な緑の芝を挟んで、アル・ファイサリア・ホテルと向き合って建っていた。二つのビルを両翼に抱えるようにファイサリア・タワーが屹立し、ホテルとレジデンスはタワーの下の広いガラス張りのホールで繋がっていた。

一カ月間近く宿泊している内に、慎太郎は、ホテルの従業員

員からすっかり気に入られていた。リヤドの街ではサウジ人も外国人も一様に愛想が良く皆ニコニコとして声を掛けてくるが、この一流ホテルの従業員は特に愛想が良かった。彼の方も、いつもアラビア語で話し掛け、それで受けをとると、続けて相手の気を引くようなことを英語で面白おかしく話した。ただ、慎太郎は、一流ホテルに滞在する時にはいつもそうだったが、一流のサービスを求める厳しさも忘れなかった。少しのことでも億劫(おっくう)がらずに要求した。

引越しは思ったより簡単だった。ホテルのレセプションは、慎太郎が向かいのレジデンスに移ることになったことを伝えると大歓迎だった。慎太郎は何もする必要は無かった。

すぐに、バトラーとベルボーイ二人の計三人がやってきて、慎太郎の指示に従い荷物をまとめてくれた。ワードローブの背広などはハンガー毎取り外し、パッケージワゴンの金色の支柱に吊るすと準備は終了だった。このパッケージワゴンは、天板にカーペットが敷かれていて両脇には真鍮にゴールドメッキのされたアーチ状の太い丸い支柱があり、その両者を

やはりゴールドメッキの丸い太い支柱で繋げた超豪華な四輪の台車だった。たった三人の従者だったが、慎太郎は、まるで大名行列をしているようなリッチな気分でレセプションホールへと降りて行った。

ホテルの玄関には大型の電動カートが用意されていて、バトラーは、ベルボーイにパツケージワゴンから全てそこに移し変えさせると、慎太郎と一緒にカートに乗り、芝が一面に敷き詰められた中庭に沿った道を通って向かいのレジデンスまで引越し荷物を運んだ。

レジデンスでは、下見の際に、レジデンスの案内をしたインド人のニヤマトラが笑顔で迎えた。

レセプションのサウジ人のファハドも下見の時に知り合いになっていたので、彼も大歓迎だった。レセプションには、他にハミードというスーダン人、ツワンというスリランカ人のベルボーイがいた。彼等も皆愛想が良く大歓迎だった。彼等は三交替、二四時間体制を敷いていた。

このような歓迎振り、それに行き届いたサービスを受ける

と、慎太郎は、ファイサリア・レジデンスに長期滞在することにして良かったとつくづく思った。また、知らず知らずの内に、疲れが溜まっていたのだろうか、滞在していたホテルから目の前のレジデンスに簡単に引越しが出来たことに大きなメリットを感じていた。

到着早々に起きたムハヤ・コンパウンドの襲撃事件、そしてその後の治安部隊の一斉捜査、テロ未遂事件とリヤドの緊張はより高まってきてはいたが、慎太郎は、サウジ治安部隊とファイサリア・グループの治安能力に期待することにした。すぐ脇に聳え立つファイサリア・タワーもキングダム・タワーとともにテロ攻撃の対象となっていることを知ったものの、このようなりヤド、いやサウジの象徴とも言えるところを簡単に攻撃させるようなことは無いだろうとも思っていた。ただ、一〇〇パーセント安全というところは世界中どこにもないし、出来るだけ出歩かないようにしようと思っていた。籠の鳥のような生活をする決心でいた。

ニヤマトラはその名前からするとヒンズー教徒に違いない。背が高く英国紳士のような洗練された振る舞いで、英語も流暢だった。あの独特な発音と抑揚のインド訛りは全く無かった。顔立ちは、ちょうどガンダーラ仏のようで古代ローマの貴人の面影を漂わせていた。目元涼しく、その大きな目はきらりと光っていた。

それに比べレセプションのファハドは、ベドウィン出身らしく色はむしろニヤマトラよりも黒いくらいだった。背も普通の日本人より低かった。

慎太郎が、レセプションのデスクの上にゲスト用として置かれた、大きなガラス容器に山積みになされたリンゴを、おどけながら眺めると、ファハドは、

「サー、どうぞ、ご自由に持って行ってください」

と慎太郎にリンゴを勧めた。慎太郎は、さらにおどけながら山積みのリンゴの周囲を眺めるとファハドに聞いた。

「ファハド、どれが良いかね」

ファハドは、喜んで、慎太郎のために品定めをすると、

「サー、どれも良いですが、これが一番ですよ」

と言って、嬉しそうに慎太郎に手渡した。

何個でも、持って行って良いですよとファハドは言ったが、慎太郎は話題としてリンゴの話をしたままでリンゴが本当に欲しかったわけではなかった。貰ったリンゴをかざしながら笑顔で、これで十分だと応じた。ファハドも笑顔で応じた。

ファハドのようなサウジ人のサラリーマンは、サウジ化の流れの中で急増している。ファイサリア・グループは、特にサウジ化の優等生で五〇〇人以上のサウジの若者を新たに雇用することを表明していた。それで、ホテルやレジデンスで彼のような若者を目にすることも多かった。

ファイサリア・グループは従業員五〇〇〇人を抱える優良企業で人気も高いから応募者には事欠かない。ただし、彼らの初任給はせいぜい二〇〇〇リヤル(約六万円)程度でサウジアラムコのように優秀な人材を確保することは困難だった。ファハドも人は良さそうだったが、とても優秀なようには見えない。サウジ人の警備員の給料は二〇〇〇リヤル以下だ。彼らと官公庁、サウジアラムコ、銀行など超一流企業に

働くサウジ人の給料との格差は相当なものだ。

慎太郎は、ファハド、ハמידに見送られながら、今度はレジデンスのベルボーイ・ツワンに伴われニヤマトラとともに自分の部屋へと向かった。

慎太郎はここでも自爆テロを意識して、最上階である四階（ヨーロッパ流の階数名。日本で言えば五階）に住むことにした。部屋は、中庭側で、正面にはこれまで滞在していたホテルが見え手前には緑の芝が広がっていた。

緑の芝の周囲には、大きな椰子の木が一定間隔で植えられていた。

ファハド大通りの向こうには、タミミというスーパーマーケットが見えた。その後ろには、白壁の高級住宅が多数見え、その先には大きな白いモスクが見えた。すがすがしい風景だった。

こちらは西側で一年中夕陽が見える。

レジデンスは、ワードローブ、箆笥(たんす)、ダイニング

テーブル、応接セットなどの豪華家具付きで、追加で購入する必要のあるものは何もなかった。テレビ、洗濯機、電子レンジ、電気オーブン、クッキングヒーターとオール電化で、それから食器洗い機まで備え付けられていて生活に必要な電化製品はほぼ完備していた。アイロンやアイロン台もあり、テレビの下にはDVDまで用意されていた。

彼が後に自分で用意したのは加湿器とトースターくらいだった。加湿器が必要だったのはリヤドが完全な乾燥状態だからだ。部屋はホテル同様完全空調で一年中同じ温度に保つことが可能となっていた。サウジは灼熱の国だから冷房は欠かせないが、リヤドの冬は時には零度以下になることもあったので暖房も必要とした。

慎太郎は、ニヤマトラの説明を聞いているうちに、彼にとって肝心のデスクと椅子(いす)がないことに気が付いた。

今更という気がしたが、ニヤマトラにそれを駄目で元々と言ってみると、ニヤマトラは特にこだわりがなければ、ホテルから持って来てくれると言ってくれた。慎太郎は二つ返事

で特にこだわりのないことを告げた。

その質問に触発されたのか、ニヤマトラは特別にFAXも電話線とは別に用意してくれるということになった。ホテルにあったものと同じ日本製の旧式のものだったが助かった。通信費はもちろん自分で払うのだが、この国では一つ別の線を引くと言うのは費用も手間もひどくかかることを慎太郎はよく知っていた。

慎太郎は別にインターネット用としてADSLも頼んでいたが、万一の故障に備え複数の通信手段を確保することは大事なことだった。ニヤマトラは、にやりと笑うと「他の人には内緒にして下さい」と右目でウィンクしながら慎太郎に頼んだ。サウジのIT化は急速に進んで来てはいたが、この超一流ホテルとそのレジデンスでも、未だに光通信は入っていないかった。ADSLも最高のもので五二二キロbps(秒当りバイト)のスピードにしか過ぎなかった。ただ、ホテルの方は、レジデンスと異なり、最近、無線LANを導入し一部のところで利用できるようになっていた。

また、無料で週に二日間だけ掃除、ベッドメイキングなどのルームメイドサービスが受けられることになっていたが、ニヤマトラは、これを特別に三日間にしてくれた。

ルームメイドとは言っても、アル・ファイサリア・ホテルもそうだが、だいたいインド、バングラディッシュ、スリランカからの男性の出稼ぎ労働者だった。お蔭で慎太郎はメイドを雇う必要がなくなった。

サウジ人は大体住み込みのメイドを雇っているが、その場合は、フィリピン、インドネシア、インド、スリランカ、それにスーダンのようなアフリカからの女性の出稼ぎ労働者だった。彼女らの給料は安く、五〇〇リヤル（一万五〇〇〇円）から八〇〇リヤル（二万四〇〇〇円）程度までだったので慎太郎が雇えない金額ではなかったが、慎太郎は人を雇う煩わしさから解放され一人静かに暮らしたかった。

ようやくアルコバル支店の南が慎太郎のところを訪れ

た。慎太郎もファイサリア・レジデンスに落ち着いた後だった。慎太郎は、南をレジデンスで迎え、レジデンスをざっと案内した後、夜には日本レストランに連れて行くことにした。

南は、ファイサリア・レジデンスを訪れるのは初めてだった。南はアルコバールでアリゾナ・コンパウンドのようなところに住んでいた。米国の超高級アパートの豪華さ、快適さを盛んに羨んでいた。

レジデンスの受付の裏には、広いリビングがあり、その脇にレジデンスの事務所と豪華な会議室があった。レジデンスの住民はこの会議室を無料で使用出来る。会議室の机、椅子ともにリヤド支店の会議室のものよりは立派だった。さすがにホテルの経営だけのことはあった。この日もたまたま空いていたので、ここで南と打ち合わせをすることが出来た。

「池波さん、この会議室は素晴らしいですね。さっき見たプ

ールもジャグジーバスが付いていたし、室内プールだから一年中快適に使えるでしょう。ジムもトレーニング・マシンだけではなく、卓球台、ビリヤードまで付いているのですから凄いですね。それにどこにいてもホテルの食事、飲み物を楽しめるのですから至れり尽くせりじゃないですか。僕もここに引越したくなっちゃいましたよ」

南は、本当に羨ましそうな口ぶりだった。

「まあ、そうだね。今は、僕もここに決めて良かったと思っている。ただし、ホテルの飲食は高いのが玉にキズだね。この紅茶も随分と高いんだよ。それにサービス・チャージが入るんだからたまらない。自分の部屋までルームサービスを頼むことも出来るけど、それはホテル並の料金だから、めったには頼めないね。大体、いつもファイサリア・モールに行つて、テイクアウトを買ってくるんだ。モールには、レバノン料理、インド料理、中華料理と何でも揃っているよ。あまり美味しくはないけどイタリア料理、そうそうそれにイギリスのフィッシュ・アンド・チップスまである。レバノン料理は

上手くて美味しいんだ・・・しかも、二〇リヤル(六〇〇円)も出せば、ペプシコーラ付きの、食べ切れないほどの量が来るんだから行かない手はないね」

慎太郎は、ファイサリア・レジデンスには話し出すと止まらなくなるほど利点があることに自分でも驚いた。

「それに、あのファイサリア・タワーの展望台に上がるのもレジデンスの住民は無料なんだ。同伴者も無料だから大変有り難いよ。そうだ、今度来たら、展望台ではなくグローブという展望レストランに連れて行ってあげるよ。あそこからの眺めは素晴らしいから」

「有り難うございます。ただ、僕もグローブには連れて行って貰ったことがあります。眺めの素晴らしいさは良く分かっています。そうですか、展望台まで無料で上がれるんですか。気分転換にも良いですね。これも羨ましいですよ。展望台には行ったことはありませんので、是非、次回は連れて行って下さい。宜しく願います」

慎太郎は、このようにファイサリア・レジデンスの利点を他人に語る度に、改めて、その利点をより明確に自覚することが出来た。

また、レジデンスやモールでいるいろんな外国人と会話をしたり様々な店を見たりすることによって、知らず知らずの内に、極度の緊張感から来る重苦しいストレスから解放されていつていることに気付いていた。

慎太郎は治安情勢を冷静に分析して行動していたし根が明るい方だったから、もともとそれほど落ち込んでいたわけではなかったが、アラブの生活により近い、いろいろな点で恵まれた環境に住めた意義は大きいとつくづく感じていたのだった。

ファイサリア・レジデンスに住んだのは正解だった。